

4

[報告 | report]

日本の舞踊アーカイブズ

慶應義塾大学アート・センターの事例

Dance Archives in Japan: A Case of Keio University Art Center

朱宣映 | Sun-Yung Joo

1 — はじめに

本報告は2013年4月から2014年3月までの1年間、協定留学生として学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻に在籍し、日本の舞踊アーカイブズを対象におこなった研究の一部である。当時、「舞台芸術分野へのアーカイブズ学的手法の適用および事例研究——舞踊を中心に」というテーマで、日本各地にある「舞踊アーカイブズ」に該当する機関の訪問調査を行った。日本のアーカイブズ学では古文書や公文書、私文書のような紙資料を対象とした研究は盛んであるが、最近になって文化・芸術分野でもアーカイブズ学を取り入れた研究手法が注目されてきている。しかし、舞台芸術はアーカイブズの対象となる公演がその場限りで失われてしまうという特性をもっているため、公演が行われるまでに生産される記録物をどのように記録し、収集・保存し、サービス提供するのか、という一連の過程が重要である。私は、舞台芸術の中でも学部時代の専攻であった舞踊に、アーカイブズ学的な視点を取り入れようと試みた。

調査した機関の代表的な例は以下の通りである。まず韓国でも注目していた慶應義塾大学アート・センター（以下

KUAC）から調査を始めた。KUACには日本における舞踊を創始した土方巽^{ひじかた たつみ}に関する「土方巽アーカイヴ」^[1]があり、世界から舞踊研究家たちが訪れる機関となっている。担当者への6回にわたるインタビューと、土方巽資料の収蔵状況を調査した。夏休みには国立劇場おきなを訪問して、組踊の伝承のための伝承者養成研修を見学し、公演資料の収集、保存方法について調査した。また冬休みには、日本の現代舞踊の先駆者である石井漠^{いし いばく}に関する資料を保存・展示している、秋田県三種町山本ふるさと文化館を訪れた。ふるさと文化館では、担当者へのインタビューを踏まえて、収蔵資料3箱と展示資料の目録作成、写真撮影を行った。

今回は日本にある舞踊アーカイブズのうち、KUACを紹介する。本報告では、「土方巽アーカイヴ」の担当者である森下隆氏、本間友氏へのインタビューと、KUACの紀要『Booklet』、ニュース・レター『ARTLET』、ウェブサイトを紹介とした。

2 — 慶應義塾大学アート・センター (KUAC) について

- 設立: 1993 年
- 場所: 〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

- ・開室時間：9:00-17:00（月曜から金曜まで／土日祝日は閉室）
- ・職員：6名（キュレーター：1名、事務：2名、所員：3名、アルバイト：若干名）
- ・来訪者数：5-10人／週
- ・施設：1階・ギャラリー、2階・事務室、閲覧室、収蔵庫
- ・活動：展覧会（年1回、1階のギャラリーで展示）、コンサート、講義など

1993年に慶應義塾大学の新しい研究所として開設されたKUACは、総合大学の特徴を活かした領域横断性、すなわち様々な学問分野の成果を総合する立場から、現代社会における芸術活動の役割をテーマに、様々な理論研究と実践活動を広く展開している。多様で多価値な新しい時代にふさわしい文化的・芸術的感性の醸成と表現活動の

可能性とを追究し、撥刺とした文化環境の創出に寄与することを目的としている。また、文化に関する情報が本来もつべき役割と意義を検討し、公共財やアーカイブズなどについて新しい提案を行うことも基本理念のひとつに掲げている[2]。

現在KUACでは、以下の7つを主な事業として行っている[3]。

- (1) 芸術関連の講演・ワークショップ・展示などの企画・開催
- (2) 慶應義塾大学アート・スペースの運営
- (3) アーカイヴの構築
- (4) 芸術関連の調査および研究の企画ならびに実施
- (5) 慶應義塾の文化財管理
- (6) アート・マネジメントに関する研究、教育および実践
- (7) 出版広報活動事業

特にアーカイブズに関する事業内容は、以下の通りとなっている。

- (1) アート・アーカイブの実践的な構築と運営
KUACは、各アーカイブを共同研究の拠点として構築し、運営している。
- (2) アーカイブ構築の方法論の公開とサポート



写真1——慶應義塾大学
アート・センター（2013年5月撮影）

現代芸術の研究に関する一次資料と二次資料を兼備した共同研究拠点構築の理論と、資料のデジタル・アーカイブの方法を含むノウハウを確立する。

- (3) 新たなアート・アーカイブの創出
既に存在する資料ではなく、芸術の現場を独自に記録、撮影、録音などして、芸術研究と芸術的行為それ自体の伝承に寄与する。また、このように作られたものを活用・サービス提供することにより、文化および芸術を広めていくことを意図している。
- (4) アーカイビングの思想的基礎付け
「集合的記憶」としての歴史が生成する現場としてのアーカイブの存在および形態について研究し、アーカイブ構築の際の作業方針を導く思想的基盤を築く。
- (5) アート・アーキビストの養成
日本の芸術研究にとって基礎となるアーカイビング作業を行うことのできる人材を各領域に提供する。
- (6) MLA 構想に向けての準備作業
Museum, Library, Archivesという3つの装置が、物品・物質レベルにおいても、デジタルの次元においても、有機的に連携し合うことによって研究と教育に大きな実をあげることができるという発想である[4]。

KUACで研究しているアーカイブズは、「土方巽アーカイヴ」が1998年4月にスタートしたのをはじめ、「瀧口修造アーカイヴ」「ノグチ・ルーム・アーカイヴ」「油井正一アーカイヴ」「西脇順三郎アーカイヴ」などがある。その中で、本報告では舞踊アーカイブズである「土方巽アーカイヴ」について取り上げる。

3 ——「土方巽アーカイヴ」

3-1: 土方巽について

土方巽（ひじかた・たつみ、1928年－1986年）は、秋田県出身。1948年に初上京した後、秋田と東京を行き来し、浮浪の10年を経て「舞踏」を発見する。そして、ジャン・ジュネへの共感と、ジュネの影響がもたらした作品「禁色」の発表（1959年）を契機にモダンダンスと訣別、アヴァンギャルドとエクスペリメントを標榜し、「暗黒舞踏」として公演活動を展開する。そして1960年代のアンダーグラウンド芸術の先駆者として、また「肉体の叛乱」以降には劇映画に出演したり、雑誌や新聞などのメディアにも登場したりと、広く文化的

な関心を集めた。1970年代には、革新的なメソッドの構築とともに、土方の舞踏は「舞踏譜の舞踏」として深化を遂げる。さらに土方による、日本的身体や東北の風土を特徴づける新たなスタイルの創造とともに、多様な「舞踏」がダンス表現として展開され、1980年代における海外への舞踏の流出を促した。彼は日本が生んだ世界的な舞踏家、振付家でありながら「暗黒舞踏」という新しい舞踊形式を確立した人物で、解体され衰弱に向かう肉体の一生に美しさを見出した[5]。

3-2: 舞踏とは

舞踏の始まりは、1959年の土方巽の作品「禁色」といわれている[6]。当時はまだ「舞踏」という言葉はなかったが、この作品の発表が舞踏の発火点となったと言える。土方が「舞踏」という言葉をいつ使い始めたのかは定かでないが、1966年7月に行った公演「性愛恩慾学指南図絵一トマト」に際し、「暗黒舞踏派解散公演」と謳っている。前年の「バラ色ダンス」の公演では「暗黒舞踏派公演」となっており、少なくとも1965年までには公に「暗黒舞踏」と称していたのである。「舞踏」という言葉が、いつ、どこから出てきたのかはともかく、「暗黒舞踏」と「暗黒舞踏」には、実質的に連続性があるとみて差し支えないだろう。

舞踏評論家である市川雅^{いちかわみやび}は、「暗黒舞踏は3つの時期に分類される」と述べている[7]。第1期は「禁色」(1959年)、「ディヴィエヌ抄」(1960年)の西洋風のエロティシズム時代である。第2期は「あんま」(1963年)、「バラ色ダンス」(1965年)、「四季のための二十七晩」(1972年)といった、近代に失われた日本の風土をもとにした動きの回復時代である。そして第3期は第2期後半から現れてくる、重心を低くとり、ガニマタで踊る独特の様式の完成である。作品「白桃房」(1999年)がこの時期に当たる。舞踏が革新的だったのは、西洋の舞踊の文脈とは全く違ったところから動きの発想があったことである。世界中のどんなダンスもまず、「正しい立ち方」から入るものだが、舞踏の場合、「立てない」というところから始まる。土方の有名な言葉に、「舞踏とは命がけて突っ立った死体である」というのがあがるが、懸命に立とうとして立てない、その様がすでに舞踏であるというわけである[8]。

3-3: 「土方巽アーカイヴ」の運営実態

現代芸術に関する「研究アーカイヴ」構築の試みであった「土方巽アーカイヴ」は、土方巽の舞踏資料を調査・保存・

公開することを目的として、1998年、KUACに設立された。1960年代に前衛芸術家としてさかんに活動していた土方の舞踏は、日本の現代芸術を代表するアーティストたちとのコラボレーションを通じて生み出され、単なるパフォーマンス・アートの領域には収まらない「横断性(トランス)」を特徴としており、この点においてKUACの「研究アーカイヴ」のパイロット・モデルとして最適の素材であった。以上のような理由により、土方巽記念資料館(旧アスベスト館、以下アスベスト館)が以前から保存・整理していた資料を基礎に、先駆的、実験的なアーカイブズを構成した。その後、KUAC自ら資料収集を続けながら、保存や公開のためのデジタル化を進めたり、既存の資料を活用して新たな創造活動を行っている。「土方巽アーカイヴ」は、研究文献(二次資料)の収集・蓄積および研究情報検索の具体化を図る「研究アーカイヴ」であること、これに加えて多様なデジタルメディアやシステムを活用するデジタル・アーカイブとして位置づけることを目指している。それゆえ、一次資料の整備を基本としつつ、資料のデジタル化を積極的に行っている[9]。

〔収集〕

土方巽の資料は、彼が活発に活動を行っていたアスベスト館で保存・整理していたものを、彼の妻であった元藤燐子^{もとふじあきこ}から、1998年に寄託もしくは使用を許可されたものを発端とする。その後、元藤が亡くなり、彼女の遺品の中から土方に関する資料が2003年に再度寄託された。それ以外に、KUACの研究者が土方の弟子や専属フォトグラファーなどの知人たちに呼びかけ、「委託」(研究目的の利用は可能だが、出版や放送などの商業目的の場合は所有者の許諾が必要、契約の更新は5年に一度)という形で収集した資料がある。この資料は、委託者の名前をつけたコレクションとして構築している。土方の知人たちがKUACに資料を委託した理由は、「土方巽アーカイヴ」を担当している森下隆氏の力によると思われる。森下氏はアスベスト館の時代から土方と行動を共にしていた人物で、「土方巽アーカイヴ」を構築する際に専門家としてKUACに招かれた。森下氏存在によって土方巽研究が進展するだけでなく、これまでの人間関係を活かして貴重な資料の収集が可能になったものと考えられる。

〔整理・分類〕

アーカイブズの所蔵資料としては、舞台で使われた音楽や公演・語りなどの音声資料(オープンリール式テープ、カセットテー

ブ)、舞台の記録や稽古風景、雑誌の取材などの写真資料(ネガ、ポジ、紙焼き)、公演などの一過性資料(ポスター、チラシ、チケット)、公演の際の印刷資料(パンフレット、プログラム)や美術資料、土方巽の蔵書となる書籍・雑誌、土方の手が入った書写資料(舞踏譜、舞踏ノート)、公演の記録や劇場映画の映像(16mmフィルム、8mmフィルム、ビデオ、DVD)などがある[10]。この資料を単に整理・分類するだけでなく、土方の作品やイメージ世界の「解釈」に向け、表現活動の生成過程(ジェネティックス)にまで踏み込んだシステムを構築しようと模索している。

最初の段階で収集した資料は、図書・雑誌・新聞記事などの書籍類5,250点、「舞踏譜」を含む原稿・画稿などの遺稿類50点、公演資料250点、写真・映像資料4,250点などで、その総数は概算1万点に及んだ。現在は、2万点以上の資料を所蔵している。この資料を、一次資料と二次資料に分け、さらに細かい分類項目が設けられている。一次資料は土方の作品や公演、活動に直接に関連する資料、二次資料は作品や公演、活動に関する情報資料であり、当初は表1のような分類となっていた[11]。

しかし、作品を中心とした分類方法では限界があるというこ

表1 ―― 土方巽資料分類表(初年度)

土方巽資料	大分類	中分類	小分類
一次資料群		舞踏譜	
		公演記録	カタログ、パンフレット、チケット、チラシ
		作品資料	舞台芸術、音楽、衣装など
		公演記録	写真、画像、映像
		言語メディア	書簡、ノート、原稿、文献、音声など
二次資料群		映像	
		作品情報	作品カタログ・レゾネ
		公演情報	作品カタログ・レゾネ
		他の活動情報	活動カタログ・レゾネ
		研究書	書籍
		研究論考・公演評	雑誌記事、論文など
		報道記事	
		インタビュー	言語、画像、映像
		展覧会記録	
		講演・シンポジウム	言語、画像、映像

表2 ―― 土方巽資料分類表(現在)

土方巽資料	大分類	中分類	小分類
一次資料(出所:土方巽)		公演記録	パンフレット、プログラム、チラシ、ポスター、チケット、インビテーション
		舞台作品資料	美術、衣装、音楽
		公演記録資料	写真、映像
		創作資料(舞踏譜)	スクラップブック、模造紙、大学ノート
		文献資料	単行(土方巽著作、土方巽筆記) 雑誌(土方巽著作、土方巽筆記)
		記録資料(土方巽)	写真、映像、音声
		筆記資料	生原稿、書簡
二次資料(出所:土方巽以外)		公演資料	パンフレット、プログラム、チラシ、ポスター、チケット、インビテーション
		文献資料	書籍、雑誌、新聞
		公演記録資料	写真、映像
		創作資料	舞踏譜、舞台美術ノート
		筆記資料	生原稿
		記録資料	音声
		研究資料	映像、写真、音声、テープ起し原稿
		公演記録資料	写真、映像



写真2 —— 研究スペース(閲覧室)



写真3 —— 収蔵庫前室

とで、アーカイブズ学の「出所原則」を取り入れ、土方が創作・収集したものを一次資料、土方以外を出所とする資料を二次資料とした。現在の分類は表2のようにになっている[12]。

〔保管・保存〕

「土方異アーカイヴ」の資料はすでに2万点を超えており、大型の舞台装置や衣装などは館内で収蔵できなくなっている。そのため、山梨県大月市と神奈川県横浜市に倉庫を借りて保管している。館内2階へ上がって事務室を抜けると研究スペース(閲覧室)があり、予約すれば誰でも資料を閲覧することができる。検索用のパソコンやテレビもあるので、映像を見ることが出来る。研究スペースの奥には収蔵庫があり、前室では未整理資料の整理事業が行われている。収蔵庫には24時間温湿度管理の設備が完備されており、事務室や研究スペースとは別に管理されている。資料を閲覧提供する際には、可能な限り予約時に閲覧を希望する資料リストを事前に提出してもらい、搬出入時の急激な温度変化で資料が痛まないよう注意を払っている。また、研究スペースは事務室と同じ空間に配置されているため、職員と利用者の距離が近く、管理しやすい環境になっている。

〔サービス・再活用〕

(1)「イバレットネクスTM」を使った舞踏譜のデジタル化、「土方異アーカイヴ」における資料デジタル情報化の出発点は、1998年度にスクラップブック形式の「舞踏譜」16点を1頁ずつ撮影し、デジタル化したことである。オリジナル資料は1頁内に多数の貼付図版が折り込まれたり、図版裏への書き込みなどが含まれている。書き込みがあちこちにあるため、テキストで記録しておくだけでは情報として不十分であったという。そこで「イバレットネクスTM」というツールを使って記述することにした。このデジタル化の主な目的として、閲覧にデジタル画像を提供することにより、オリジナル資料へのアクセスを最小限にとどめ、これ以上の劣化を防止することがあげられる。将来的には、インターネットを通じてこのシステムを公開し、地方や海外の研究者がアクセスして新しい研究成果を創造できるような環境を目指している[13]。

(2)『舞踏譜——舞踏花伝』、本とDVD制作

「動きのアーカイヴ」プロジェクトの一環として、舞踏の「動き」を映像化し、その過程の記録を『舞踏譜——舞踏花伝』に収めた[14]。土方異は、いわゆる「舞踏譜の舞踏」を構築的に成立させる過程で数多くの「動き」を創造した。ここでいう「動き」とはムーブメント、モーション、ポーズの総称を指し、その数は5000を優に超えると思われる。土方異は膨大の数の動きを開発、創造し、それらを自在に組み合わせることで作品を作っていた。その動きはひとつひとつ名付けられることで記号化され土方のスクラップブックやメモ、それに弟子である舞踏家たちのノートに残され、いわゆる舞踏のノテーションとなっている[15]。その概要は以下の通りである。

- (1) 土方異が創造した「動き」の分類(記号化)
- (2) 舞踏譜による土方舞踏の「動き」の解説
- (3) 舞踏譜による舞踏の方法と構造の解明

「土方異アーカイヴ」は、単に資料を整理・保存することにとどまらず、デジタル化や関係者との連携をはかり、資料を再活用する事業を数多く行っている。

4 —— おわりに

KUACの特徴は、大学附属機関という利点を活かして慶

應義塾大学の卒業生や教員の資料を収集することはもちろん、特に教育に力を入れ、アート・マネジメントやアーカイブズ構築のために必要な講座や事業を行っている。文化・芸術分野においてアーカイブズ学の手法はまだ適用されておらず、これからの研究が何より欠かせない。「土方巽アーカイヴ」も、はじめは研究を行いながらアーカイブズの構築を行っていたが、いまや土方巽や舞踏に関する資料の保存機関として国内最大規模となっている。また、KUACは土方の弟子たちの協力を得て、出版やDVD制作を行っている。これは舞台芸術アーカイブズの共通する特徴で、寄託や寄贈だけでは収集資料の範囲に限られるからである。芸術家が自分の芸術活動や世界を理解してくれる人々と密接に関係していることに着目し、資料を受け入れる段階から土方や舞踏に関する専門的な知識を持っている人物を



写真4-6 —— 帰国報告会(2014年2月21日)

専門家として採用しているのも特徴の一つである。文化・芸術アーカイブズは、その文化・芸術が始まった当時から現在まで活動している人々との関係を築いている専門家や、アーキビストが力を発揮し、貴重な資料を収集し、その資料を活用して新たなものを生み出したりする。

協定留学生として1年間、舞踏に関する資料館、博物館、図書館等の様々な機関を訪問し、調査した。そして、この1年間の調査を踏まえて、「ダンスアーカイブズの記録物収集方策に関する研究」^[16]というテーマで修士論文を執筆し、2015年1月に韓国・明知大学校記録情報専門大学院へ提出した。内容は、これまでの資料の収集方法は寄託・寄贈が多くを占めており、資料の質と量に限界があった。そこで資料の収集戦略として、「一括型」、「企画型」、「参加型」の3つの方策を提案している。第一の「一括型」は、これまでによく使われた方法で、同じ出所から資料を収集するため、所有者や情報提供者たちとの関係形成が何より重要である。また、聞き取りによる口述記録などを同時に作成すれば、新しい記録物を得られるメリットがある。第二の「企画型」は、収集企画のテーマを決める最初の段階で、文化・芸術分野の流れや歴史をよく知る専門家やアーキビストが中心になり、様々な出所から同じテーマに関する資料を収集する方法である。そして、記録の生産という重要な作業を行う。先に述べたように、舞台芸術の分野では寄託・寄贈によるだけでは資料収集に限界があり、記録物の生産も重要な収集方策の一つであると主張した。第三の「参加型」は、舞踏公演を行う際に公演を企画する機関や組織、参加する団体や人々が協力し、公演の制作段階に沿って資料を収集する方法である。これは公演の企画段階から資料を収集し始め、公演にかかわる団体や人々の資料を加えつつ、観客や評論家が生産する資料までを含むものである。

今回の修士論文では、舞踏の資料を様々な方策によって収集することで、その領域を拡大する戦略を提案した。今後は、アーカイブズの整理、分類、保存、活用、サービス提供などに関する研究が進み、文化・芸術分野でのアーカイブズ学が社会にもっと広まることを願いながら、これからも頑張っていきたい。日本での研究を支えてくださった、アーカイブズ学専攻の先生方、学生のみなさん、そして何度も調査に訪れた私を快く受け入れてくださった慶應義塾大学アート・センターの方々にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

1 — KUACではアーカイブズを「アーカイヴ」と表記する。本稿では固有名詞として用いられている場合には、そのまま使用する。

2 — 前田富士男「アート・センターの開設」、『塾』、慶應義塾、1994年、3-30頁

3 — KUACウェブサイト「事業概要」、<http://www.art-c.keio.ac.jp/about/overview/> (2014-09-30アクセス)

4 — 桑川麻里生「『パスポート』の記録——人文学アーカイヴ構築の意義とその先に来るべきもの」、『平成21年度文部科学省人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業 芸術創造資源のための対話型アーカイヴ構築推進プログラムキックオフ・シンポジウム 対話型アーカイヴの可能性』、慶應義塾大学アート・センター、2010年、20-21頁

5 — KUACほか主催「土方巽舞踏大解剖VI HIJIKATA '68-'70-'72」(2011年8月6日)上映会チラシ

6 — 以下の記述はKUACウェブサイト、「舞踏について」、<http://www.art-c.keio.ac.jp/old-website/archive/hijikata/about/butoh.html>を参照した(2014-09-30アクセス)。

7 — 乗越たかお著・チェ・ビョンジュ訳『コンテンポラリー・ダンス徹底ガイド HYPER』(韓国語版)、BOOKSHOW COMPANY、2007年、205頁

8 — 乗越たかお「ダンスバイブル：コンテンポラリー・ダンス誕生の秘密を探る」、河出書房新社、2010年、131頁

9 — KUACウェブサイト、「土方巽アーカイヴについて」、<http://www.art-c.keio.ac.jp/archive/hijikata/> (2014-09-30アクセス)

10 — KUAC「土方巽アーカイヴ」チラシ

11 — 前田富士男「芸術的制作行為の再構築——“土方巽アーカイヴ”と研究アーカイヴ・システム」、『バラ色ダンスのイコノロジー：土方巽を再構築する』、慶應義塾大学アート・センター、2000年、39-41頁

12 — KUACでは現在、新たな分類方法とシステム連携を試みてデータベースをリニューアル中である(2014年10月17日現在)。

13 — 村井丈美「土方巽アーカイヴ「舞踏譜」解折支援ツール開発の試み」、『文部科学省「オープン・リサーチ・センター整備事業(平成13年度～平成17年度)研究報告書 国際シンポジウム パフォーミング・アーツ・アーカイブの現在』、慶應義塾大学デジタルアーカイブ・リサーチセンター、2004年、11頁

14 — 和栗由紀夫『舞踏譜——舞踏花伝』、ジャストシステム、1998年

15 — KUAC「土方巽アーカイヴ」チラシ

16 — ダンスアーカイブズの「記録物」とは、舞踊の行為過程で生産された記録で、公演そのものの記録にとどまらず、公演を支援する行政の資料、公演に関わる個人や組織に関連する資料、公演の記憶を拡大し、集合的な行為のコンテキストを保存するため意図的に記録した、有機的なつながりをもつ資料すべてを含める。本報告では「資料」と同じ意味として使用している。

〔補記〕

朱宣映さんは、本専攻と韓国・明知大学校記録情報科学専門大学院との間で2010年3月に締結された学術交流協定に基づき、2013年4月～2014年3月の1年間、協定留学生として本専攻に在籍した。在籍期間中は博士前期課程1年生として、専攻の授業はもとより、7月の国内研修旅行(宮城県仙台市)、11月の海外研修旅行(ベトナム・ハノイ)など、専攻行事にも参加した。

留学中に行った調査研究の成果報告として、2014年2月21日に「留学生研究報告会」を行った。本原稿はその際の報告を基にしている。

